

「そんなちや隣の旦那にでもようく嘸してもらつたら聴くかも知んねえぞ、それより外ねえぞおめえ」婆さんの一人が卯平に向つていつた。

「さうすりやはあ、お互にえ、鹽梅で疵もつかねえんだから、俺れもさうは思つちや居んだが、此れ、いふのをかしたもんで」卯平の頬には稍紅を潮して彼は婆さんにいはれたことが嬉し相に見えるのであつた。

「なぬに、さうだもかうだも有るもんか、え、から、さうだ奴等打つ飛ばしてやれ」暫く黙つて居た先刻の爺さんは小柄な身體を堅めて又嗷鳴つた。

「うむ、なぬに俺れもそれから去年の秋は火箸で打つ飛ばしてやつたな」卯平は斯ういつて彼にしては著るしく元氣を恢復して居た。

「さうだとも、錢でも何でも呉んなけりや、よこせつちばえ、んだ、饑ねえなんちへば米でも麥でも奪取つてやれ」爺さんは周圍へ唾を飛ばした。

「それでも俺れ打つ飛ばしてから質の流れたなんち味噌一樽買つたな、駄味噌で佳味かねえが今ちやそんなもお汗は吸へるこた吸へんよ」卯平は自分の手柄でも語るやうないひ方であつた。

「食料借しがるなんち業つくばりもねえもんぢやねえか、本當に罰つたかりだから、俺らだら生かしちや置かねえ、いや全くだよ、親のげ食あせんの惜いなんち野郎は突つ刺したつて申し開き立つとも、俺らだら立派に立て、見せらな、卯平確乎しろ、俺らだら勘次等位な、又うんち目に逢わせらな、いや本當に俺れに掛つちや酷えかたなこんで」爺さんは激しくさうして例の自慢をいひ續けた。

「さうだこと云つたつておめえ、以前から他人のこと切つたこともねえ癖に」側から服裝の好い婆さんが貶していつた。

「そんだが、此の年齢になつて懲役に行ぐな厭よ俺れも」爺さんはずつと垂れた頭を手で抑へて笑ひこけた、婆さん等もどつと哄笑した。

「勘次等、そんな時から俺れた口も利かねえや」卯平は他人には頓着なしにかういつて其の舌を鳴らして唾を嚥んだ。

「口利かねえ、そんなら口兩方へふん裂えてやれ、さあ利くか利かねえかと斯うだ」小柄な爺さんは自分の口を兩手の指でぐつと擴げていつた、圍爐裏の邊は暫く騒ぎが止まなかつた。卯平の心も假令一時的でも周圍の刺戟から幾分の力を添られて或勢ひを恢復したのであつた。

「確乎しろえ、え、から」小柄な爺さんは別れる時復敗鳴つた。卯平の足もとは稍力づいて見えて居た。

卯平は念佛寮から歸つて来た時どかりと火鉢の前に坐つた。彼は勢ひづけられて居た。勘次は例の如く遠ざかつた。

「おつう、米と挽割麥出せ」卯平は座に就くと突然かういつた。

「夥多出せ」間を措いて又いつた。

「何すんでえ、爺は」おつぎはそれを軽く受て斯ういつた。卯平は目を盛めた。彼は、闇夜にずん／＼と運んだ足が急に窪みを踏んでがくりと調子が狂つたやうな容子であつた。

「明日、要れば出してやんびやな、爺等どうせ夜なんを要りやすめえしなわ」おつぎは又賺すやうにいつた。卯平はもう反駁していはなかつた。彼は只其癖の舌を鳴らしてごくりと唾を嚥むのみであつた。次の朝に成つて酒氣が悉く彼の身體から發散し盡したら彼は平生の卯平であつた。

二十四

卯平は決して悪人ではなかつた。彼は性來巖盤で大きな身體であつたけれど、其の盛れたやうな目には不斷に何處か軟かな光を有つて居るやうで、思ひ切つてせねば成らぬ事件に出逢うても二度や三度は逡巡するのがどうかといへば彼の癖の一つであつた。ふすりと膠ない容子でも表面に現れたよりも暖かで、女に脆い處さへあるのであつた。彼が盛年の頃に他人の目についたのは、自分自身の仕事には餘り精を出さないやうに見えることであつた。大概のことでは一向に驅がぬやうな彼の容子が外からではさうらしくも見えるのであつた。も一つは服裝を決して崩さぬことであつた。彼は他人に備はれて居ながら、草刈にでも出る時は手拭と紺の單衣と三尺帶とを風呂敷に包んで馬の荷鞍に括つた。其頃は草というては悉皆薙倒して龜殻でも縛るやうに中央を束ねて馬に積むのであつた。雑木林の間に馬を繋いだ儘で彼は衣物を改めてあてどもなくふらつのが好きであつた。それでも彼の強健な鍛鍊された腕は定められた一人分の仕事を果すのは日が稍傾いてからでも強ち難事ではないのであつた。此の二つの外には別段此れというて教へる程他人の記憶にも残つて居なかつた。それでも彼の大きな體軀と性來の器

用とは主人をして比較的餘計な給料を惜ませなかつた。彼は其の奉公して獲た給料を自分の身に費して其の頃では餘所目には疑はれる年頃の卅近くまで獨身の生活を繼續した。其間に彼は微毒を病んだ。一時はふらくと懶相な蒼い顔もして居たが、病氣は暫くして忘れたやうに其の強健な身體の何處にか潜伏して畢つた。彼は勿論それを癒つたこと、思つて居た。其の内に彼は娘をとつて小さな世帯を持つて稼ぐことになつた。娘は間もなく懐妊したが胎兒は死んでさうして腐敗して出た。自分も他人も瘡つ子だといつた。二三人生れたがどれも發育しなかつた。それでも幼兒の死ぬのは瘡つ子だからといふのみで病毒の慘害を知る筈もなく随つて怖れる筈もなかつた。お品の母は非常な貧乏な寡婦で、足が立つか立たぬのお品を懐にして悲惨な生活をして居た。それを卵平は心から哀憐の情を以て見て居た。お品の母は百姓としては格別の働さを有たなかつたから、寡婦として獨立して行くには非常な困難でなければ成らぬだけ身體の何處にか軟かな容子があつて、清潔好な卵平の心を惹いた。何處か人懐こい處があつて只管に他人の同情に渴して居たお品の母の何物をか求めるやうな態度が漸く二人を近づけた。

其の頃彼の女房は長い間病氣に悩まされて居た。病氣は遂に恢復しなかつた。女房は或年復た妊娠して臨月が近くなつたら、どうしたものか数日の中に腹部が膨脹して一夜の内にもそれ

がずん／＼と目に見える。女房は横臥することも其の苦痛に堪へないで、積んだ蒲團に倚り掛つて僅に切ない呼吸をついて居た。胎兒を泛かしめた水が餘計に溜つたのである。其の頃は醫者の手でさへそれをどうすることも出来なかつた。加之彼は醫者を聘ふことが億劫で、大事な生命といふことを考へることさへ心に暇を持たなかつた。僥倖にも卵膜を膨脹させた液體が自分から逃げ去る途を求めて其の包圍を破つた。數升の液體が迸つて、驚いて横へた身を蒲團の上に浮かさうとした。それと共に安住の場所を失うた胎兒は自然に母體を離れて出ねばならなかつた。胎兒は勿論死んでさうして手を出した。其の時女房は非常に疲憊して居たが、我慢をするからといつたばかりに卵平はぐつと力を入れて引き出した。彼の悪意を有たぬ手が斯の如く残酷に働かされたのは、夫婦の間には僅でも他人の手を藉ることに金錢上の恐怖を懐かしめられたからであつた。女房はそれでも死ななかつた。然し殆んど想像されなかつた疼痛が滿身に沁み渡つた。臆て非常な發熱が伴つた。それからといふものは三年も臥つた儘で季節が暖かに成れば稀には蒲團からずり出して僅に杖に縋つては軟かな春の日をさへ刺戟に堪へぬやうに眩しがつて居た。

お品の母との關係が餘計な告口から女房の耳に入つた。其の頃暑さに向いて居た所爲でもあ

つたが女房はそれを苦し始めてからがつかりと寝れたやうに見えた。女房が死んだ時は卯平は枕元に居なかつた。村落には赤痢が発生した。豫防の注意も何もない彼等は互に葬儀に喚び合せて少しの懸念もなしに飲食をしたので病氣は非常な勢ひで蔓延したのであつた。卯平も患者の一人であつた。お品の家に悩んで居た。お品の母の懇切な介抱から彼は救はれた。彼はどうしても瀕死の女房の傍に病軀を運ぶことが出来なかつた。其の寝れた目の憂へるのを彼は見るに忍びなかつたからである。彼のさういふ意志は長い月日の病苦に噴まれて僻んだ女房の心に通ずる理由がなかつた。さうして女房は激烈な神経痛を訴へつゝ死んだ。卯平は有聲に泣いた。葬式は姻戚と近所とで營んだが、卯平も漸と杖に縋つて行つた。

其の秋の盆には赤痢の騒ぎも沈んで新しい佛の数が殖えて居た。墓地には掘り上げた赤い土の小さな塚が幾つも疎末な棺臺を載せた居た。大抵は赤痢に罹つて漸く身體に力がついたらばかりの人々が例年の如く草刈鎌を持つて六日の日の夕刻に墓葬というて出た。墓の邊は生るに任せた草が刈拂はれて見るから清潔に成つた。中央に青竹の線香立が杙のやうに立てられて、石碑の前には一つづつ、青竹の簀の子のやうな小さな棚が作られた。卯平も墓葬の群に加はつた。彼のまだ力ない手に持つた鎌の刃先が女房の棺臺の下を覗いてからりと渡つた時彼は悚然とし

て手を引いた。蛇が身體の後半を彼の足もとに現して白い腹を見せた。鎌の刃先が蛇を切つたのである。蛇は暫く凝然として居て極めて徐ろに棺臺の下に隠れた。卯平の顔は黄昏の光に蒼かつた。彼はそれから他出することも稀になつた。恢復しかけた病後の疲勞が夜は粘るやうな汗を分泌させた。それから八日目に村落の者が佛を迎へに提灯持つて行つた時は刈り拂はれた草が暑いといつても秋らしくなつた日に其の生殖作用を急がうとして聳然と首を擡げて居た。村落の人々は好奇心に驅られて怖づくも棺臺をそつと揚げて見た。蛇は依然としてだらりと横たはつた儘であつた。人々は睜つた目を見合せた。村落の者が去つた後には小さな青竹の線香立からそこの石碑の前からじり／＼と身を焼いて行く火に苦んで悶えるやうに煙はうねりながら立ち騰つて寂寥たる黄昏の光の中に彷徨うた。それから又四日目に佛を送つて村落の者は黄昏の墓地に落ち合つた。蛇は猶且棺臺の陰を去らなかつた。蛇は自由に匍匐ふには餘りに瘡痕が大きかつた。反り返つた唇のやうに膨れた肉は埃に塗れて黒く變じて居た。棺臺を透かして人が之を覗へば恐怖を懷いて少しづつ、のたくるのであつた。女房が出たのだといつて村落の者は減らず口を叩いた。暫くしてお品の母の耳へも蛇の噂が傳はつた。それからいふものお品の母は一夜でも卯平を自分の家から放さない。三つに成つて居たお品が卯平を慕うて確

乎と其の家に引き留めたのはそれから間もないことである。蛇の嘯は何時の間にか消滅した。それは悉皆が互の心に記憶を反覆して快よしとする程彼等を憎んでは居なかつたからである。其の後長い歳月を經てお品の母が死んだ時以前の嘯を見たり聞いたりして居た者の間にのみ僅に記憶が喚び返された。お品の母は腰に病氣を持つて居た。卯平は自分の手から作つた罪といふものは殆んど見られなかつた。唯彼は盛年の頃は他の傭人等と共に能く猫を殺して喫てた。尤も其頃は猫でも犬でも飼主を離れて、雞を狙ふのが彷徨いた。彼等は罾を掛けてそれを待つた。然し大抵の家々では雞でさへ家の内では煮るのを許容さないので、後の庭へ竹で三本の脚を作つてそれへ鍋釜を掛けた程であつたから、猫を殺すことが恐ろしい罪惡のやうに見られたのであつた。猫は辛い鹽鮭を與へれば腰の利かない病氣に罹ると一般にいはれて居るので卯平が腰を悩んで居るのを稀には猫の祟だと戯談にいふものもあつた。それでもさういふ噂は擴がらなかつた。彼は憎惡と嫉妬とを村落の誰からも買はなかつた。憎惡も嫉妬もない其處に故意と惡評を生み出す程百姓は邪心を有つて居なかつた。村落の西端に僻在して居る彼には興味を以て見させる一つの條件も具へて居なかつた。只むつとりとして他人に訴へることも求めることもない彼は一切村落との交渉がなかつた。彼の一身の有無は少しも村落の爲に輕重する處が

なかつた。

二十五

初冬の梢に、慌しく波つてそれから暫く騒いだ儘其の後は確と忘れて居て稀に思ひ出したやうに枯木の枝を泣かせた西風が、雜木の梢に白く連つて居る西の遠い山々の彼方に横臥て居たのが俄に自分の威力を逞しくすべき冬の季節が自分を棄て、去つたのに氣がついて、吹くだけ吹かねば止められない其の特性を發揮して毎日其の特有な力が輕鬆な土を空に捲いた。

其の日も拂曉から空が餘りにからりとして鈍い軟かな光を有たなかつた。毎日吹き捲くる疾風が其の遠い西山の水雪を含んで微細に地上を捲うて撒布したかと思ふやうに霜が白く凝つて居た。

勘次は平生の如くおつぎを連れて開墾地へ出た。おつぎは半纏を後へふはりと掛けた儘手も通さないで、肩へは櫛を斜に掛けて萬能を擔いで居た。白い手拭とそれから手拭の外に少し覗いた後れ毛の歩く度にふらふらと動くのもしみ／＼と冷た相であつた。草木及び地上の霜に瞬

さしながら横にさうして斜に射し掛ける日に遠い西の山々の雪が一頻光つた。凡てを通じて褐色の光で包まれた。其の遠く連つた山々の頂端にはぼつり／＼と大小の簇雲が凝つた儘に揺き亂されて暫く動かなかつた。遂にはそれが一つに成つて山々の所在を暗まして、其の末端が油煙の如く空に向つて消散しつゝ、あるやうに見え始めた。其處には毎日必ず喧囂な聲音が人の鼓膜を騒がしつゝ、ある其の巨人の群集が、其の目からは悲惨な地上の凡てを苛めて爪先に蹴飛ばさうとして、山々の彼方から出立したのだ。其の驚くべき迅速な脚が空間を一直線に、さうして僅な障害物であるべき梢の凡てを壓しつけ／＼林を越えて疾驅して来るのは今もう直である。竹を伐つて束ねたやうに寸隙もなく簇がつて居る其の爪先に蹴られては怖えに怖えた草木は皆聲を放つて泣くのである。さうしてもう泣かねば成らぬ時間が迫つて居る。

朔次は霜白い自分の庭を往來へ出ると無器用な襟の林が彼の行くべき方に従つて道に沿うて連つて居る。彼の破れて、毎日打ちつける疾風の爲に傾けられた笹の垣根には、狭い往來を越えて襟の落葉が熊手で掻いたやうに聚つて且つ連つて居る。凡そ襟の木程頑健な木は他に有るまい。乾燥した冬枯の草や落葉に煙草の吸殻が誤つて火を點じて、それが焔に林を焼き拂うても溢の強い、表面が山葵おろしのやうな襟の皮は、黒い火傷を幹一杯に止めても、他の針葉樹

に見るやうではなく、春の雨が數次軟かに濕せば遂にはこそつばい皮の何處からか白つばい芽を吹いて、粗剛な厚い皮の圍みから通れて爽快な呼吸を仕始めたことを悦ぶやうに／＼と伸長して、遂には伐つても／＼猶且／＼と骨立つて幹が更に形づくられる程旺盛な活力を恢復するのである。彼等はさういふ特性を有つて居ながら了解し難い程臆病である。黄色な光が快よく鮮かに満ちて居る晩秋の水のやうな淡い霜が竊におりる以前から其の葉は悉くくると其の周圍が捲れ始めて、他の雜木は其の葉をからりと落して其の梢よりも遙に低く垂れて居る西の空の明るい入日を透して見せるやうに疎に成るのに、確乎としがみついて離れない。彼等は漸く樹相を形づくると共に、鋸の齒が殘酷に渡つて少しでも餘裕を與へられないのである。それで彼等の間には自然に只恐怖する性質のみが助長されたのであるのかも知れない。それだから既に新に伐るべき時期を過して、大木の相を具へて團栗が其の淺い皿に載せられるやうに成れば、枯葉は潔く散り敷いてからりと爽かに樹相を見せるのである。丁度それは子孫の繁殖と自己の防禦との必要を全く忘れさせられた梨の接木が、大きな刺を幹にも枝にも持たなく成つたやうに、恐怖が彼等を去つたのである。

然しながら林の襟は幾ら遠く根を伸して迅速な生長を遂げようとしても、冷かな秋が冬を地

上に導くのである。彼等は其の冬の季節に於て生命を保つて行くには凡ての機能を停止して引き緊らねば成らぬ。それでは彼等は氷雪の爲に枯死せねばならぬ。其の季節に彼等の最後の運命である薪や炭に伐られるやうに一番適當した組織に變化することを餘儀なくされるのである。彼等はそれから其の貴重な呼吸器であつた枯葉を一枚でも枝から放すまいとし又離れまいとして居る。生育の機能が停止されると共に粘着力を失ふべき筈の葉柄が確乎と保たれてゐる。そこで乾燥した枯葉は少しのことにさへ相倚つてさや／＼と互に恐怖を耳語るのである。然し樹木が吸収して獲た物質の一部を地及び空氣に還元せしめようとして凡ての葉を相から奪つて、到る處空潤で且簡單にすることを好む冬の目には、櫟の枯葉は錯雜し溷濁して見えねばならぬ。それで巨人を載せた西風が其爪先にそれを蹴飛ばさうとしても、恐ろしく執念深い枯葉は泣いてさうして其の力を保たうとする。偶力が足りないで吹き散らされたのは、さういふ時に非常に便利なやうに捲いてゐるので、どんな陰でも其の身を託する場所を求めてころ／＼と轉がつて行つては、自分の伴侶が一つに相倚り相抱いて微風にさへ絶えず響を立てて戦慄しつゝあるのである。

勘次は斯ういふ櫟の木を植ゑて林を造るべき土地の開墾をする爲にもう幾年といふ間雇はれ

て其の力を竭した。彼は漸く林相を形づくつて來た櫟林に沿うて田圃を越えて走つた。田圃の鳴が何に驚いたかきと鳴いて、刈株を掠めるやうにして慌て、飛で رفت。さうして後は白く閉じた氷が時々びりびりと鳴てしや／＼と壊れるのみで只静かであつた。田圃を透して林の間から見える其遠い山々の雲は稍薄くなつて空を濁して居た。聽て雑木林の枝頭が少し動いたと思つたらさうつといふ響が勘次の耳に鳴つた。巨人の脚が逼つたのである。彼はひとつと思はず呼吸が切迫した。

毎日吹き渡る西風は乾燥しつゝある凡ての物を更に乾燥させねば止まない。雨が稀にしんみりと降つても西風は朝から一日青い常緑木の葉をも泥の中へ拗切つて撒布らす程吹き舞れば、それだけで土はもう殆んど乾かされるのである。土が保有すべき水分がそれ程蒸發し盡しても其の吹き渡る間は西風は決して空に一滴の雨さへ催させぬ。それでも有聲に深く水を藏して居る土は垢の如き表皮のみを掻き拂つて行く疾風の爲には容易に其の力を失はないで、夜が更ければ幾らでも空氣中に保たれた水分を微細に結晶させて一杯に白く引きつける。土が宵徹さういふ作用を營んだばかりに、日は拂曉の空から横にさうして斜に其の霜を解かして、西風は直にそれを乾かして殘酷に表土の埃を空中に吹き捲く。其の力が烈しい程拂曉の霜が白く、其

れが白い程亂れて飛ぶ鴉の如き簇雲を遠い西山の頂嶺に伴うて疾風は驅るのである。兩方が疲  
憊して勢を消耗する季節の變化を見るまでは其の争ひは止むことがない。

其の日も埃が天を焦して立つた。其の埃は黄褐色で霧の如く地上の凡てを掩ひ且つ包んだ。  
雑木林は一齊に斜に傾かうとして梢は彎曲を描いた。樹木は皆互に泣いて嘸きながら、幾らか  
日の明るさをも妨げて居る其の濃霧から通れようとするやうに間斷なく騒いだ。霧は悲惨な凡  
ての物を互に知らせまいとして吹き立ち、數十間の距離に於ては其の物體の形狀をも明かに  
示さない。雑木林の樹木は開墾地の周圍にも混亂した。然し勘次が目を放つて居るのは足の爪  
先二三尺の、今唐鍔を以て伐去つて遙に後へ引いてそつと棄てた趾の一點である。埃は土に幾  
らでも濕ひを持つた彼の足もとからは立たなかつた。おつぎは勘次が起した塊を一つくりに萬  
能の脊で叩いてさらりと解して平にならして居る。輕鬆な土から凝集つて居た塊は解せば直に  
吹き拂はれた。おつぎは當面に埃を受けるのには遠く吹きつける土砂が頬を走つて不快であつ  
た。手拭の端を捲くつて浴びせる埃の爲に髪の毛の荒れるのを酷く嫌つた。それでも其手もと  
は疎略ではなかつた。勘次は矢立の如き硬直な身體を伸長し屈曲させて一步步と運んだ。彼  
は周圍に無數な樹木の泣いて嘸くのを耳に入れなかつた。加之彼は自分の耳朶に鳴るさへ心

づかぬ程懸命に唐鍔を打つた。彼は滿身に汗して居た。

卯平は暇を惜しがる勘次が唐鍔を執つて出た時朝餉の後の口を五月蠅く鳴らしながら火鉢の前  
にどつかりと坐つて居た。破れた草葺の家をゆさぶつて西風がごうつと打ちつけて來た時には  
火鉢の焔はまだ白く灰の皮を被つて暖かつた。天井もない屋根裏からは煤が微かにさら／＼  
と散つて、時々ぼつりと凝集つた儘に落ちた。喬木が遮り立つて其の梢に蒼い空を見せて居る  
庭へすら疾風の驚くべき周到な手が袋の口を解いて倒にしたやうに埃が満ちてさら／＼と沈ん  
だ。一日さうして止め處もなく駈つて行く巨人の爪先には此の平坦な田や畑や山林の間に介在  
して居る各村落の茅屋は悉く落葉を掻けて出た葺のやうな小さな悲惨な物でなければならな  
かつた。各自の直上を中心點にして空に弧を描いた其の輪郭外の横にそれから斜に見える廣く  
且つ遠い空は黄褐色な霧の如き埃の爲に只焔に焼かれたやうである。卯平は自分の小屋に身を  
窄めた。暫く彼の火鉢から立つて、狭い壁から壁に衝突つて彷徨ひ出た薄い煙が疾風の爲に直  
ぐにごうつと蹴散らされて畢つた。狭い小屋の内はそれから復た沈んだ。卯平は少し開いた戸  
口から其の小さく盛めた目で外を見た。狭い庭の先に紙捻を植ゑたやうな桑畑の乾燥しきつた  
輕鬆な土が黄褐色な霧の中へ吹つ立つて行くのが見える。さうして南の空は極めてぼんやりと



して其の形態が現はれて又隠れた。栗の木の側に木の枝を杓に打つて拵へた鍵の手へ引つ掛けた枯棒が、ごうつと吹く毎にぐらりぐらりと動いて釣瓶が外れ相にして、外れまいとして争うて騒いで居る、卯平は彼ぼんやりした心が其處へ繋がれたやうに釣瓶を凝視した。彼は暫くしてから庭に立つた。彼は其癖の舌を鳴らしながら釣瓶へ手を掛けた。釣瓶の底には僅に保たれた水に埃が浸されて沈んで居た。外側は青い苔の儘に乾燥して居た。彼は鍵の手の杓を兩手に持つて其大きな身體の重量を加へて堅に壓へて見た。小さな杓は毎日水の爲に軟かにされて居る土へぐつと深くはひつた。鍵の手は深く釣瓶の内側を覗いて居たので先刻よりも確乎と釣瓶を引き止めた。彼はそれから狭い戸口をひたりと閉して枯燥した手足を穢い蒲團に包んでごろりと横に成つた。

午餐に勘次が戻つて、復口中の粗剛い飯粒を噛みながら走つた後へ與吉は鼻緒の緩んだ下駄をからりと引きずつて學校から歸つて來た。足袋も穿かぬ足の甲が鯨の皮のやうにぱりりと皺だらけに成つて居る。彼はまた冷め切らぬ茶釜の湯を汲んで頻りに飯を掻込んだ。粘膜のやうに赤く濕ひを持つた二つの道筋を傳ひて冷たく垂れた涙を彼は啜りながら、箸を横に持ち換へて汁椀の鹽辛い干納豆を掴んで口へ入れたる茶碗の中へ撒いたりして幾杯かの飯を盛つた。

飯粒は茶碗から彼の胸を傳ひて土間へぼろりと落ちた。彼は土間に立つた儘喫べて居た。彼は飯粒の少し底に残つた茶碗を膳の上に轉がしてぱりと飯臺の蓋をした。卯平は横臥した儘でおつぎが喚んだ時に來なかつた。おつぎが再び聲を掛けて開墾地へ出てからも彼は暫く懶い身體を蒲團から起さなかつた。彼がふと思ひ出したやうに狭い戸口を開けて明るい外の埃に目を盛めて出て行つた時與吉は慌しく飯臺の蓋をした處であつた。

「汝りや、今日はどうしてさうえに早えんでえ」卯平は太い低い聲で聞いた。

「あゝ」と與吉は唇を反らして涙を啜りながら

「先生そんなも、明日は日曜だから此れ切で歸つてもえ、つちつたんだ」

「午餐くつたか」卯平はのつそりと飯臺の側に近づいた

「汝りや、爺が膳さかうだに零して」と彼は先刻よりも低い聲で

「おとつつわに見らつたら怒られつから」斯ういつて又

「汝つ等おとつつわは怒りつ坊だから」と沈んで呟くやうにいつた。彼は膳の上に散つて居る飯粒を一つ一つに撮んで、それから干納豆は此れも一つ一つに汁椀の中へ入れた。汁椀は手に取つて、椀の腹を左の手に軽く打ちつけるやうにして納豆を平にした。おつぎは午餐から開墾

地へ出る時、菜にする干納豆を汁椀へ入て彼の爲に膳を据ゑて行つたのである。與吉は遠慮もなく其の膳に向つたのである。卯平は飯蓋の蓋を開けて見たが暖味がないので彼は躊躇した。茶釜の蓋をとつて見たが、蓋の裏からはだらりと滴りが垂れて僅かに水蒸氣が立つた。茶釜は冷めて居たのである。それ程に空腹を感じぬ彼は箸を執るのが厭になつた。彼は身體が非常に冷えて居ることを知つた。それに右の手が肩のあたりで硬ばつたやうで動かしやうによつてはさや／＼と疼痛を覺えた。彼は病氣が其處に聚つたのではないかと思つた。それが睡眠中の身體の置きやうで一時的變調を來したのだかどうか分らないにも拘はらず、彼は唯病氣故だと極めて畢つた。極めたといふよりも彼の果敢ない僻んだ心にはさう判断するより外何もなかつたのである。彼の心は只管自分を悲惨な方面に解釋して居ればそれで済んで居るのであつた。彼の寒れた身體から其の手が酷く自由を失つたやうに感ぜられた。手は軽く痺れたやうになつて居た。彼は冷えた身體に暖氣を欲して、茶釜を掛けた籠の前に懶い身體を据ゑて蹲居つた。彼は更に熱い茶の一杯が飲みたかつたのである。彼は籠の底にしつとりと落ちついた灰に接近して手を翳して見た。まだ軟かに白い灰は微に暖か／＼つた。彼はそれから大籠の落葉を掘み出して茶釜の下に突込んだ。與吉も側から小さな手で掘んで投げた。卯平の足もとには灰を捲う

て落葉が散亂した。落葉は卯平の衣物にも止つた。卯平は竹の火箸の先で落葉を少し透すやうにして灰を掻き立て、見ても火はもうぼつちりともなかつたのである。彼はそれから燐寸を探して見たが何處にも見出されなかつた。彼は自分の燐寸を探しに狭い戸口へ與吉をやらうとした。與吉は甘えて否んだ。彼はどうしても懶い身體を運ばねばならなかつた。

卯平の手もとは餘程狂つて居た。彼はすつと燐寸を擦つたが其の火は手が落葉に達するまでには微かな煙を立て、消えた。燐寸はさうして五六本棄てられた。與吉は其の不自由な手から燐寸を奪ふやうにして火を點けて見た。卯平は與吉のする儘にして、丸太の端を切り放した腰掛に身體を据ゑて其の寒れた軟かな目を盛めて居た。慌てた與吉の手は其の軸木の先から徒らに毛のやうな煙を立てるのみであつた。彼は焦躁れて卯平の足もとの灰へ燐寸の箱を投げた。箱はからりと鳴つた。箱の底はもう見えて居たのである。卯平は目を盛めた燐寸をとつて復すつと擦つて、ゆつくりと軸木を倒にして其の白い軸木を包んで燃え昇らうとする小さな火を枯燥した大きな手で包んで、大事相に覗いた。それが復三度反覆された。手の内側がぼんやりとしてそれから段々に明るく成つて火は漸く保たれた。茶釜の底に觸れるばかりに突込まれた落葉には斯うして火が點けられた。落葉には灰際から其の外側を傳ひて火がべろ／＼と渡つ

た。卯平は不自由な手の火箸で落葉を透した。火は迅速に其の生命を恢復した。彼等の爲に平生殆んど半以上を無駄に使はれて居る焔が竈の口から捲れて立つた。然し其の餘計に洩れて出る焔が彼の自由を失うて凍らうとして居る手を暖めた。彼は横に轉がした大籠からかさゝと掻き出しては燃え易い落葉を間断なく足した。

與吉は卯平の側から斜に手を出して居た。卯平は與吉の小さな足の甲へそつと手を觸れて見た。手も足も孰もさうとこそつばかつた。與吉は斜に身を置くのが少し窮屈であつたのと、叱言がなければ唯悪戯をして見たいのとで側な竈の口へ別に自分で落葉の火を點けた。針金のやうな火をちらりと持つた落葉の一ひらゝが煙と共に軽く騰つた。落葉は直ぐに白い灰に化つて更に幾つかに分れて與吉の頭髮から卯平の白髪に散つた。煙の中には其の白い灰が後から後からと立て落ちた。與吉はいつも彼等の伴侶と共に路傍の枯老に火を點じて、それが黒い趾を殘してめろゝと燃え擴がるのを見るのが愉快でならなかつた。彼は又火が野茨の株に燃え移つて、其處に茂つた茅葦を焼いて焔が一條の柱を立てると、喜悅と驚愕との錯雜した聲を放つて痛快に叫びながら、遂には其處に恐怖が加はれば棒で叩いたり土塊を擲つたり、又は自分等の衣物をとつてはさりゝと叩いたりして其火を消すことに力めるのであつた。迅速で且壯

快な變化を目前に見せる火が彼等の悪戯好きな心をどれ程誘導つたか知れない。彼は落葉を握んでは竈の口に投じてほうゝと燃えあがる焔に手を隠した。茶釜がちらゝと少し響を立て、鳴り出した時卯平は乾びたやうに感じて居た喉を濕らうとして、懶い聲を少し起して膳の上の茶碗へ手を伸した。自由を缺いて居た手が、爪先で持つた茶碗をころりと落させた。茶碗の底に冷たく成つて居た少しの水が土間へぼちりと落ちてはねた。飯粒が共に散らばつた。彼は又悠長に茶碗をとつて汚れた部分を手でこすつて、更に茶釜の熱湯を注いで足もとの灰へ傾けた。蓋をとつたのでほうゝと威勢よく立つて居る水蒸氣がちらゝと白く立つて落ちる灰を吸うた。彼は漸くにして柄杓の手を放つて再び茶釜の蓋をした時俄にほうつと立つた焔の聲を聞いた。彼が思はず後を見つた時與吉の驚愕から發せられた泣き聲が耳を打つた。熾な火の柱が近く目を掩うて立つて居た。彼は又直に激しい熱度を顔一杯に感じた。火はどうした機會か横に轉がした大籠の落葉に移つて居たのである。與吉は初め野外の悪戯に用ゐた手段を以て其の火を叩いて消さうとし又掻き出さうとした。乾燥した落葉は迅速に火を誘導して彼の横頬を越つた。彼は思はず聲を放つたのである。卯平は慌て、再び茶碗を落した。彼は突然與吉を傍に掻き退けた。彼はさうして無意識に火に成つた落葉を掻き出さうとして、自由を失うた手の鈍

い運動が其の火を消すに何の功果もなかつた。彼は焰の儘に軽い落葉の籠を庭へ投げればよかつたのである。疾風は必ず其の落葉を散亂せしめて、火は遠く燃えながら走るにしても、片々たる落葉は廣い區域に悉く其の俤をも止めないで消滅して畢はねば成らぬのであつた。然しながら慌てた卯平の手は此の如き簡單で且最良である方法を執る暇がなかつた。火は復怒つて彼の頬を舐り彼の手を焼いた。彼の目は昏んだ。一時に激した落葉の火はそれが久しく持續されなくても老衰した卯平の心を奪ふには餘りあつた。卯平の視力が再び恢復した時は火は既に天井の梁に積んだ葉束の、亂れて覗いて居る穂先を傳ひて昇つた。火は乾燥した葉束の周圍を舐つて、更に其焰が薄闇い家の内から通れようとして屋根裏を偲うた。それが迅速な火の力の瞬間の活動であつた。舐つた火は更に此れを嚙んでずた／＼に崩壊した葉束は其の火を保つた儘既に其の勢ひを沈めた落葉の上にはばら／＼と亂れ落ちて其處に復た火勢が恢復された。愕然として自失して居た卯平は葉の火を浴びた。彼は慌て、戸口へ逃げ出した時火は既に赤い天井を造つて居た。煙は四方から檐を傳ひてむく／＼と奔つて居た。蛇の舌の如くべろ／＼と焰が吐き出された。吹き募つて居る疾風は直ぐに其赤い舌を吹き拗切らうとした。後から／＼と勢力を加へて吐き出す煙や焰は穂の如く壓し靡かされた。

火は瞬間に處々落ち窪んで糞れた屋根を全く包んで畢つた。卯平は數分時の前に豫期しなかつた此の變事を意識した時殆んど喪心して庭に倒れた。土塊の如く動かぬ彼の身體からは憐に微かな煙が立つて地を偲うて消えた。葉の火を浴びた時其の火が揺蕩な彼の衣物を焦したのである。然し其の火は灸の如き跡をばつ／＼と止めたのみで衣物の心部は深く嚙まなかつた。埃は彼を越えて走つた。與吉は火傷の疼痛を訴へて獨悲しく泣いた。

疾風は其の威力を逞つて包んだ焰を掻き退けようとして其餘力が屋根の葺草を吹き捲つた。火は直に其の空隙に嚙み入つて、益其處に力を逞しくした。益然と空に奔騰しようとする焰を横に壓しつけ壓しつけ疾風は遂に塊の如き火の子を擡んで投げた。其の礫はゆらり／＼とのみ動いて居る東隣の森の木がふはりを受けて遮断した。唯一部、三角測量臺の見通しに障る爲に切り拂はれた空隙がそれを導いた。火の子は東隣の主人の屋根の一角にどさりと止つた。勘次の家を包んだ火は屋根裏の煤竹を一時に爆破させて小銃の如き響を立てた。其の響は近所の耳を驚かした。其の人々が騒げつけた時は棟はどさりと落ちて、疾風の力を凌いで空中道に焰を揚げた。其の時は既に東隣の主人の家を火がべろ／＼と嘗めつゝあつたのである。村落の者が萬能や鹿口を持つて集まつた時は火は凄まじい勢ひを持つて居た。それでも大きな建物

を燒盡するには時間を要した。其の間に村落の者は手當り次第に家財を持つて其れを安全の地位に移した。其の點に於て白晝の動作は敏活で且つ容易であつた。家財道具が門の外に運ばれた時火勢は既に凡ての物の近づくことを許容さなかつた。家を圍んで東にも杉の喬木が立つて居た。森の梢の上に遙に立ち騰らうとして次第に其の勢ひを加へる焔を、疾風はぐるりと包んだ喬木の梢からごうつと壓しつけ、吹き落ちた。焔は斜にさうして傾きつゝ、群集の耳には疾風の響を奪つて轟々と鳴り續いた。吹き落す疾風に抵抗して其の力を逞しくしようとする焔は深く木材の心部にまで確乎と爪を引つ掛けた。さうして其の焔は近く發えた杉の梢から枝へ掛けて爪先で引つ掻いた。其の度に杉は針葉樹の特色を現して樹脂多い葉がぱりぱりと凄じく鳴つて焼けた。屋根裏の竹が爆破した。消防の群集は殆んど皮膚を焼かれるやうな熱さを怖れて段々遠ざかつた。小さな唧筒は其熾な焔の前に唯一條の細い短い彎曲した白い線を描くのみで何の功果も見えなかつた。他の村落の人々が聞き傳へて、田圃や林を越えて、其の間に各自の體力を消耗しつゝ、驅けつけるまでには大きな棟は熱火を四方に煽つて落ちた。疾風の力が此れを壓しつけて、周囲の喬木の梢が他と隔て、白晝の力が其の光を奪はうとして居るので、空に立つて見えるのは遠いやうで且つ近いやうで一種の凄惨な氣を含んだ煙である。それでも喬

木の梢の上に火は壓迫に苦んで居るやうに稀に立ち騰つては又壓つけられた。徒勞である唧筒へ群集は水を汲むのに近所の有ゆる井戸は皆釣瓶が届かなくなつた。群集は唯囁々として混亂した響の中に騒擾を極めた。火の力は此の如くにして周囲の村落をも一つに吸収した。然しながら、其の群集は勘次の庭を顧みようとはしなかつた。

黄褐色の霧を以て四圍を塞がれつゝ、只管に其の唐鍬を打つて居た勘次は田圃を渡つて林を越えて遠く行つて居た。彼は此の凶事を知る理由がなかつた。開墾地に近い小徑を走つて行く人の慌しい容子を見咎めて彼は始めて其火を知つた。それが東隣の主人の家に起つたことを聞かされて彼はおつぎを促して立つた。彼は疾驅しようとして、其の確乎と身を据ゑた位置から一步を踏み出した時、じやりつと其爪先を打つて財布が落ちた。彼が顧みた時財布は二三歩後に發見された。彼は簡単な三尺帯を解いて、ざりつと其處に大きな塊のやうな結び目を作つて其の財布を包んだ。

彼は殆ど其の脚力の及ぶ限り走つた。彼はおつぎが後に續かぬことを顧慮する暇もなかつた。彼は其の主人を懐つたのである。勘次は後の田圃へ出た時霧の如き埃を隔て、主人の家の森から騰る熾な煙を見て今更の如く恐怖した。彼は又ふと自分の後の林に少し見えて居た自分の家

の棟が見えないのに其心を騒がせた。毫も其の力を落さぬ疾風は雑木に交つた竹の梢を低くさうして更に低く吹靡けて居れど棟はどうしても見えなかつた。彼は又煙が絲の如く然も凄じく自分の林の邊から立ては歴しつけられるのを見た。彼が自分の庭に立つた時は、古い煤だらけの疎末な建築は焼盡して主要の木材が僅に焰を吐いて立つて居る。火は尚ほ執念く木材の心部を嚼んで居る。何物をも吹き拂はねば止むまいとする疾風は、赤い煙を包む白い灰を寸時の猶豫をも與へないで吹き捲つた。心部を嚼まれつゝある木材は赤い齒を喰ひしづたやうな無数の罅が火と煙とを吐いて居た。勘次は殆んど惘然として此の急激な變化を見た。彼は足もとが踉蹌する程疾風の手に突かれた。彼は庭に立つて泣いて居る與吉を見た。與吉の横顔に印した火傷が彼の感亂した心を騒がせた。勘次は又其の側に目を瞑つて後向に成つて居る卯平を見た。卯平は何時の間に誰がさうしたのか筈の上には横たへられてあつた。彼は少い白髪を掻き拂つて焼いた火傷のあたりを手で捲うて居た。

「汝りやどうしたんだ」勘次は忙しく聞いた。

「木の葉へ火くつつえたんだ」與吉は咽び入りながらいつた。

「汝でも悪戯したんぢやねえか」勘次は遅緩しげに烈しく追求した。

「俺ら爺と火あつてたんだ、さうしたらくつつかつたんだ」さういつて與吉は俄に聲を放つて泣いた。彼は何の爲にさう悲しくなつたのか寧ろ頑是ない彼自身には分らなかつた。彼は只涙がこみあげて止め處もなく悲しくさうしてしみじみと泣き續けた。勘次はそれを聞いた瞬間肩の唐鍬を轉がしてふつりと土を打つた。唐鍬の刃先は卯平の頭に近く筈の一端を掠つて深く土に立つた。彼はそれから焼盡して一杯の煙になつた自分の家に近く駆け寄つた。彼は火の恐ろしい熱度を感じて少時躊躇して立つた。後の林の稍俛首れた竹の外側がぐるりと焼かれて變色して居たのが彼の目に映じた。それと共に彼は隣りの森の中の群集の囂々と騒ぐのを耳にして自分が今何の爲に疾走して來たかを心づいた。然し彼はもう其の群集の間に交つて主人の災厄に赴く心は起らなかつた。彼は其の群集の聲を聞いて、自ら意識しない壓迫を感じた。彼は酷く自分の哀つばい悲惨な姿を泣きたくなつた。彼は疾走した後の異常な疲勞を感じた。彼は自分の燒趾を掻き立てようとするのに齋口も萬能も皆其火の中に包まれて畢つて居た。彼は空手であつた。唐鍬を執つて彼は再び熱い火の側に立つた。熱さに堪へぬ火の側を彼は飛び退つて又立つた。彼は其の刃先の鈍く成るのを思ふ暇もなく唐鍬で、また立つて居る木材を引つ掛けて倒さうとした。

おつぎは後れて漸く垣根の入口に立つた。おつぎはもう自分の家が無いことを知つた。貧窮な生活の間から數年來漸く蓄へた衣類の數點が既に其の一片をも止めないことを知つてさうして心に悲しんだ。汗がびつしりと髪を生際を濡して疲憊した身體をおつぎは少時惘然と庭に立  
てた。

おつぎはそれから又泣いて居る奥吉と死骸の如く横はつて居る卯平とを見た。おつぎは萬能を置いて奥吉の火傷した頭部をそつと抱いた。奥吉は復涙がこみあげて咽びながらしみくと悲しげに泣いた。其の聲は聞くものを只泣きたくさせた。疲れたおつぎの目にはふつと涙が泛んだ。おつぎは又手で抑へた卯平の頭部に疑ひの目を注いで、二人の悲しむべき記念に思ひ至つた。おつぎは其の原因を追求して聞かうとはしなかつた。おつぎはしみくと奥吉を心に勤つて更に

「爺」と卯平の蕭に近づいてそつと膝をついた。平生のおつぎは勘次との間を繋かうとする苦心からの甘えた言辭が卯平の心に投ずるのであつた。現在おつぎの心裏には何の理窟もなかつた。只しみくと悲しい痛はしい心からの言辭が自然に其の口から出るのであつた。おつぎは未だ燃えてる火を忘れたやうに卯平を越えて覗いた。卯平はおつぎの聲が耳に入つたので後を

MON

向かうとして僅に目を開いた。地を掠つて走りつゝある埃が彼の頬を打つて彼の横たへた身體を越えた。彼は直に以前の如く目を閉ぢた。

「爺も火傷したのか」おつぎは靜にいつて卯平の手をそつと退けて左の横頬に印した火傷を見  
た。

「痛てえか、そんでもたえしたこともねえから心配すんなよ」おつぎは火に薙ぎ拂はれた穢い卯平の白髪へそつと手を當た。卯平はおつぎのする儘に任せて少し口を動かすやうであつたが、又そつと吹きつける疾風に妨げられた。おつぎは隣の庭の騷擾を聞いた。然も其種々な叫びの錯雜して聞える聲が自分の心部から或物を引つ攫んで行くやうで、自然にそれへ耳を澄すと何だか遺る瀬のないやうな果敢なさを感じて涙が落ちた。涙は卯平の白髪に滴つた。おつぎが心づいた時勘次は徒らにさうして發作的に汗を垂らして動いて居るのを見た。おつぎの心も屹として未だ燃えつゝある火に移つた。おつぎは俄に自分の萬能を執つて勘次の手に握ませた。勘次は始めて心づいて、熱した唐鍬を冷さうとして井戸端へ走つた。鍬の手を離れた釣瓶は高く空中に浮んでゆつくりと大きく動いて居た。彼は流し尻にすふりと唐鍬を投じて又萬能を執つた。

一日吹いた疾風が礫と其の力を落したる、日が西の空の土手のやうな雲の端に近く据つて漸次に没却しつゝ、瞬いた。其の一瞬時強烈な光が横に東の森の喬木を鎔た橙色に染めて、更に其の光は隙間を遠くすつと手を伸した。冷たく且薄闇く成るに従つて焼趾の火が周囲を明るくした。隣りの火はほんのりと空をほかした。隣の庭には自分の村落から他の村落から手桶や飯臺へ入れた握り飯が數多く運ばれた。消防に力を竭した群集は白い握飯を食つた。群集は更に時分を見計らつてはぐら／＼と柱を突き倒さうとした。丈夫な柱はまだ火勢があたりを遠ざけて確乎と立つて居た。他の村落の人々は漸次に歸り去つた。自村の人々は交代に残つて熾な火の番をした。歸り行く人々が其の序に勘次の庭に挨拶に立つたのみで、南の家から笹へ入れた握飯が来た丈であつた。彼はそれでも其の爲に空腹を運れた。隣の主人からは暫くして其の集つた握り飯の手桶を二つ三つ持たせてよこした。夜に成つてから近所の者の手で卯平は念佛寮へ運ばれた。勘次は卯平を乗せた荷車を曳いた。彼はそれから隣の主人へ挨拶に出たが、自分の喉の底で物をいうて逃げるやうに歸つた。彼は其の夜は三人が凍つた空を戴いて焼趾の火氣を手頼りに明かした。卯平を横へた筈は誰も取りには來なかつた。筈は三人に席を與へた。勘次は失火に就いて與吉から要領を得なかつた、然しながら彼の悲憤に堪へぬ心が噴まうとするに

は與吉の泣いて止まぬ火傷がそれを抑へつけた。勘次は疲れた。

## 二十六

夜が深けるに随つて霜は三人の周圍に密接して凝らうとしつゝ、火の力をすら壓しつけた。彼等は冷めて行く火に段々と筈を近づけた。勘次もおつきも薄い仕事衣にしん／＼と凍る霜の冷たさと、じり／＼と焦すやうな火の熱さとを同時に感じた。與吉は火傷へ夜の冷たさが沁みたるやうかといつて火に當らうとするのは猶且火傷の疼痛を加へるだけであつた。彼は思出したやうに泣いては又泣いた。遂には泣き疲れてしん／＼と只聲を呑んだ。それが却て勘次とおつきを心掻き亂した。疲れた二人はう／＼としながら到頭眠ることが出来なかつた。焼趾に横はつた梁や柱からまだ微かな煙を立てつゝ、次の日は明けた。勘次はおつきを相手に灰燼を掻き集めることに一日を費した。手桶の冷たい握飯が手頼ない三人の口を糊した。勘次は炭のやうに成つた瘦せた柱や梁を垣根の側に積んだ。彼は其の新しい手桶へ水を汲んでまだ火の有り相な梁や柱へばしやりと其の水を掛けた。彼は灰を掻き聚めて處々圓錐形の小山を作



つた。彼は灰燼の中から鍋や釜や鐵瓶や其の他の器物をだん／＼と萬能の先から掻き出した。鐵製の器物は其の形を保つて居ても悉皆幾年も使はずに捨てあつたものゝやうに變つて居た。彼はそれをそつと大事に傍へ聚めた。茶碗や皿や凡ての陶磁器は熱火に割ねて畢つて一つでも役に立つものはなかつた。勘次は赤く焼けた土を草鞋の底で段々に搔き拂かうとした時、黒く焦げたやうな或物が草鞋の先に掛つた。焼けて變色した銅貨の少し凝つたやうになつたのが足に觸れてぞろりと離れた。彼は周圍にひよつと目を放つた。彼の目に入るものは此も一心に灰の始末をして居るおつぎの外にはなかつた。彼は銅貨を竊と竹の林の側へ持つて行つた。彼はざりつと縛つた三尺帯を解いて、財布を括つた結び目に齒を掛けて漸く其財布を取り出した。焼けた銅貨を彼は財布へ投げ込んで復たざりつと腰へ括つた。彼はさうして再びさよ／＼と周圍を見た。勘次は幾つかの小山を形づくつた灰へ葉や粟幹でしつかと蓋をした。彼はそれを田や畑へ持ち出さうとしたので、雨に打たせぬ工夫である。其の葉や粟幹は近所の手から與へられた。彼は住居を失つた第二日目に始めて近隣の交誼を知つた。南の女房は古い藥鐘と茶碗とを持つて来てくれた。勘次は平生何とも思はなかつた此れ等の器物にしみ／＼と便利を感じた。彼は藥鐘のまだ熱い湯を茶碗に注いで彼等の身を落ちつける唯一枚の筵の端に憩うた。俄

に空洞とした燒趾を限つて立つて居る後の林の竹は外側がぐるりと枯れて、焦げた枝が青い枝を掩うて幹は火に近かつた部分は油を吹いてきら／＼と滑かに變つて居た。

東隣の主人の庭には此の日も村落の者が大勢集まつて大きな燒趾の始末に忙殺された。それで其人々は勘次の庭に手を藉さうとはしなかつた。彼等は隣の主人に對して平素に報いようとするよりも將來を怖れて居る。彼等は皆齊しく静かに落ついた白晝の庭に立ることが其の家族の目に觸れ易いことを知つて居るのである。勘次は疲れた身體を其の日も餘念なく使役した。其の夜は三人が空を戴いて狭い筵に明すのには、僅でも其身體を暖める火は消滅して居たのである。三人は其夜南の家に導かれた。勘次もおつぎも汗と灰と埃とに汚れた身體を風呂に洗ひ落した。快よかつた其風呂が氣盡しな他人の家に彼等をぐつすりと熟睡させて二日間の疲勞を忘れさせようとした。

與吉の横頬は皮膚が僅に水泡を生じて膨れて居た。彼は其の日の機嫌が悪かつた。南の女房は其の水泡に頭髮へつける胡麻の油を塗つてやつた。

勘次は燒木札を地に建て、彼に第一の要件たる假の住居を造つた。近所から聚めた粟幹の僅少な材料が葺草であつた。それは漸と雨の洩るか洩らないだけの薄い葺方であつた。固より壁

を塗る暇はない。そこらこらの林の間に刈り残された葎や篠を刈つて来て、乏しい藁と交ぜて垣根でも結ぶやうにそれを内外から裂いた竹を當て、ぎつと締めた。彼は南の家から借りた鋸で大小の焼木杵を挽切つた。遂に彼は後から焼けた竹を伐つて来て、簀の子のやうに横へて低い床を造つた。竹を伐つた鉋も彼の所有ではなかつた。彼の熱火に焼かれて獨で冷めた鉋も鎌も凡ての刃物はもう役には立たなかつた。彼の手に完全に保たれたものは彼が自分の手を待たで居る唐鍔のみである。彼は此の壁もない小屋を造る爲に二日ばかりの間は毫も他を顧みる暇がなかつた程心が忙しかつた。彼の悲惨な狭い小屋には薬罐と茶碗とそれから火事の夕方に隣の主人がよこした新しい手桶とのみで、夜の身を横へるのに一枚の蒲團もなかつた。砥石を掛けて磨かねば使用に堪へぬ鍋や釜は彼の更に狭い土間に徒らに場所を塞げて居た。其の土間にはまだ簡単な圍爐裏さへなくて、彼は火を焚くのに二本脚の竹を立て、それへ薬罐を掛けた。おつぎは只勘次の仕事を割けて居た。然し其の間にも念佛寮へ運ばれた卯平を忘れては居なかつた。おつぎは火事の次の日に勘次へは黙つて念佛寮を覗いて見た。おつぎは卯平へ目に見えた心算をするのに何の方法も見出し得なかつた。おつぎの懐には一錢もないのである。おつぎは手桶の底の凍つた握飯を焼趾の炭に火を起して狐色に焼いてそれを二つ三つ前垂にくるん

で行つて見た。おつぎはこつそりと覗くやうにして見た。卯平は誰がさうしてくれたか唯一人で蒲團にゆつくりとくるまつて居た。枕元には小さな鍋と膳とが置かれて、膳には茶碗が伏せてある。汁椀は此れも小皿を掩うて伏せてある。卯平は寝られた蒼い顔をこちらへ向けて居た。彼は眠つて居た。おつぎはすや／＼と聞える呼吸に凝然と耳を澄した。おつぎはそれから枕元の鍋蓋をとつて見た。鍋の底には白いどろりとした米の粥があつた。汁椀をとつて見たら小皿には醬が少し乗せてあつた。卯平は冷めた白粥へまだ一口も箸をつけた容子が無い。おつぎは焼いた握飯を一つ枕元にそつと置いて遮げるやうに歸つて来た。老人の敏い目が到頭開かなかつた。卯平は疲れた心が静まつて漸く熟睡した處なのであつた。

掘立小屋が出来てから勘次はそれでも近所で鍋や釜や其の他の日用品を少しは貰つたり借りたりして使つた。おつぎは其の間一心に焼けた鍋釜を砥石でこすつた。竹の床へ敷く筵が三四枚、此も近所で古いのを一枚位づゝ呉れた。さうしてから漸く蒲團が運ばれた。それは彼がぎつしりと腰に括つた財布の力であつた。米や麥や味噌がそれどころにか工夫が出来た。彼は斯うして命を繋ぐ方法が漸と立つた。二三日過ぎて與吉の火傷は水泡が破れて死んだ皮膚の下が少し糜爛し掛けた。勘次は心から漸く其の瘡痕を勘つた。彼は平生になくそれは放任つて置け

ば生涯の畸形に成りはしないかといふ憂をすら懐いた。さうして彼は鬼怒川を越えて醫者の許に與吉を連れて走つた。醫者は微笑を含んだ儘白いどろりとした薬を陶製の板の上で練つて、それをこつてりとガーゼに塗つて、火傷を掩うてべたりと貼てぐる／＼と白い綱帯を施した。手先の火傷は柑類のやうな疼痛も疥癩もなかつたが醫者は其處にもぎつと綱帯をした。與吉は目ばかり出して大袈裟な姿に成つて歸つて來た。

與吉は綱帯をしてから疼痛もとれた。綱帯は又直接他の物との摩擦を防いで、彼に快よく村落の内を彷徨はせた。綱帯が乾いて居れば五六日は棄て、置いても好いが、液汁が浸み出すやうならば明日にも直に來るやうにと醫者はいつたのであるが、液汁は幸ひにぼつちりと點を打つたのみで別段擴がりもしなかつた。

おつぎは燒趾の始末の忙しい間にも時々卯平を見た、然し卯平を慰めるに一錢の蓄へもないおつぎは猶且何の方法も手段も見出し得なかつたのである。

おつぎは勘次が漸くにして求めた僅な米を竊と前垂に隠して持つて行つた。米には挽割麥が交つて居る。おつぎは決して卯平を満足させ得ること、は思はなかつたが、彼が喫べて見ようといへば粥にでも炊いてやらうと思つたのである。然しおつぎが恥ぢつ、それでも餘儀なく隠

して持つて行つた米の必要はなかつた。念佛の伴侶が交互に少しづつ、の食料を持つて來てくれるのを卯平は屹度餘して居た。

「爺、そんなもちつた鹽梅よくなつたやうだが、痛かぬえけえ」おつぎは毎度のやうに反覆して聞いた。言辭は軟かですうして潤んで居た。卯平の火傷へも油が塗られてあつた。水泡はいつか破れて糜爛した患部を、油は見るから厭はしく且つ穢くして居た。死んだ細胞の下から鮮かに赤く見え始めた肉芽は外部の刺戟に對して少しも抵抗力も持つて居ない細胞の集りである。朝夕の冷たさすら其の過敏な神経を刺戟した。卯平は何時でも右の横頬を上にして居る外はなかつた。

「さうだにかゝんなくつても癒えなわ」おつぎは、油が穢くした火傷を凝然と見て居ると自然に目が盛められて、寧ろ自分の瘡痕の経過でも聞くやうに卯平の枕へ口をつけていつた。

「うむ」と卯平の低く響く聲が決して其の言辭のやうな簡單な意味のものではなかつた。

「そんなもどうにか家も拵えたから、爺ことも連れてくべよなわ」おつぎの聲は漸次に潤んで低くなつた。卯平はそれでもおつぎの聲を聞くと目を瞑つた儘、殆ど明瞭とは見られぬやうな微かな笑ひが泛ぶのであつた。

「どうえの建て、え」卯平は有繫に聞きたかつた。

「どうえのつて爺は、焼けた柱掘立てたのよ、そんだから壁も塗んねえのよ」

「そんぢや、藁か葎でおッ塞えたんでもあんびや」

「うむ、さうだわ、そんだから觸つとがさくすんだよ」斯ういつておつぎの聲は少し明瞭として来た。おつぎは羞を含んだ容子を作つた。卯平は悲惨な焼小屋を思ふと、自分が與吉と共に失錯つたことが自分を苦めて酷く辛かつた。彼は俄に目を盛めた。

「痛えのか」おつぎは目敏くそれを見て心もとなげにいつた。おつぎは驚れて沈んだ卯平の側に居ると、遂自分も沈んで畢つて只凝然と凍んだやうに成つて居るより外はなかつた。それでもおつぎは長い時間をさうして空しく費すことは許容されなかつた。

「又來つかんな」とおつぎは沈んだ聲でいつて出て行くのを、後で卯平の背からは涙が少し洩れて、其の小さな玉が暫く寝れた皺に引掛つてさうしてはろりと枕に落ちるのであつた。

勘次は一度も念佛寮を顧みなかつた。五六日過ぎて與吉は復た醫者へ連れられた。醫者は穢く成つた細帯を解いてどろりとした白い薬を復た陶製の板で練つて貼つた。先頃のよりも濃くして貼つたからもう此れで遠い道程を態々來なくても此れを時々貼つてやれば自然に乾いて畢

ふだらうと、其の白い薬とこれからガーゼとを袋へ入れてくれた。與吉は俄に勢ひづいた。彼は時々卯平の側へも行つた。卯平は横臥した目に與吉の細帯を見て其の心を痛めた。

或日與吉が行つた時、先頃念佛の時に卯平へ酒を侷めた小柄な爺さんが枕元に居た。

「おめえ、さうだに力落すなよ、此らつ位な火傷なんぞどうするもんぢやねえ、俺れ癒してやつから、どうした彼ん時からぢや痛かあんめえ、彼の禁厭で火しめしせえすりや奇態だから」さういつて爺さんは佛壇の隅に置いた燈明皿を出して其の油を火傷へ塗つた。卯平は其の爲る儘に任せて動かなかつた。

「力落しちや駄目だから、俺らなんぞこんな處ぢやねえ、こつちな腕、馬に咬つた時にや、自分で見ちやえかねえつて云はつたつけが、それでも俺れ自分で手拭の端斯う齒で啞えてぎい、つと縛つて、さうして俺ら馬曳いて來たな、汗は豆粒位なのぼろ／＼垂れつけがそれでも到頭我慢しつちやつた、何でも力落しせえしなけりや癒んな直だから、年寄つちや癒りが面倒だの何だのつてそんなことあねえから」爺さんは只管卯平の元氣を引立てようとした。

「俺らそんだが、さうえ怪我しても馬は憎かねえのよ、馬に煎れんのが癖でひ／＼と騒いだ處俺れ手横さ出して抑えたもんだから畜生見界もなく噛つたんだからなあ」と彼は酒を飲んで

居なかつたので聲は低かつたが、それでも漸々に勢ひを加へて居た。

「俺ら白え薬貼つたんだぞ」與吉は先刻から油を塗つた卯平の瘡癩に目を注いで居てかう突然にいつた。

「なわに、さうだ物なんぞ貼んねえつたつて汝ッ等がよりやこつちの方が早く癒つから」小柄な爺さんは暫く手もとへ置いた油の皿を再び佛壇の隅へ藏つた。

「それでも俺れこたはあ、來なくつても癒つからえ、つて薬よこしたんだぞ」與吉は少し間を隔て、怖づ／＼いつた。

「癒るもんかえ、汝等が」小柄な爺さんは抑捺ふやうにして嘸鳴つた。

「癒らあえ、そんだつて痛かねえ俺ッ等」與吉は驚いたやうにいつた。

「其の白え薬だつちのよこしたのか」卯平は微かな聲で聞いた。

「さうなんだわ」

「汝りや、それ姉にでも貼つてもらあのか」

「俺ら貼んねえ」

「そんぢや薬はどうしたんでえ、汝りやあ」

「おとつつあ持つてんだから俺ら知んねえ」與吉は上り框に胸を持たせて下駄の爪先で土間の土を叩きながら卯平と斯うして數語を交換した時

「え、からそんな薬なんぞのこと構えたてんなえ、此れで癒つから」と小柄な爺さんは傍から打ち消した。

「乞食野郎奴、汝ッ等が親爺は見やがれ、汝こた醫者さ連れてく錢持つてけつかつて、此處は一度でも來やがんねえ畜生だから、見ろ、其のつ位だから罰當つて丸焼に成つちやあんだ」と爺さんは更に獨憤つた語勢を以ていつた。

「おとつつあは爺に焼かつたつちつてんだわ」與吉は勢ひに壓せられて羞むやうにしながら漸といつた。

「汝等親爺奴云つたのか」爺さんは更に

「汝りや何ちつたそんで」と嘸鳴つた。與吉は悄れて暫く沈黙した。

「俺ら火あたつてたら木の葉さくつゝえたんだつて云つたんだわ」

「さう云はつても仕方ねえよ」與吉のひひ畢らぬ内に卯平は言辭を抉んだ。

「筵棒、つん燃したくつて、つん燃するもの有るもんか」爺さんは少し激して

「過失だもの後で何ちつたつて仕やうあるもんぢやねえ」と獨で力んだ。

「それでも氣の毒で來らんめえつて云つたわ」與吉はぼさりといつた。稍大きく成つた彼は嗚る爺さんの前に恐怖を懷いたが又壓へられることに微かな反抗力を持つて居た。

「爺こと來らんめえつて云つたのか、姉も云つたのかあ」

「姉は云はねえ、姉爺が處さ行くつちとおとつたお怒んだ、さうしたら姉に怒つたんだわ」與吉は自分の心に少しの隔てをも有して居らぬ卯平の前に知つて居ることを矜るやうにいつた。

「汝こた怒んねえのか」小柄な爺さんは與吉の隠さぬ言辭に少し力んだ勢ひが抜けたやうになつて斯ういつた。

「俺れこた怒んねえ、俺ら怒つたつ位通げつちやあから」與吉のいふのを聞いて爺さんの憤りは和げられた。卯平は蒼い顔をして凝然と瞑つた目を盛めて聞いて居た。圍爐裏には籠菜の一枝も燻べてなかつた。三人は暫くぼさりとした。

「爺くんねえか」與吉は危むやうにいつた。

「汝りや何欲しいつちんだ」小柄な爺さんは底力の有る聲を低くしていつた。

「俺ら一錢もねえから」と卯平はこそつばい或物が喉へ支へたやうにぞつくりと唾を嚥んだ。

彼の目の敏が餘計にぎつと緊つた。

「俺らまあだ、ちつた有つたんだつげが、煙草入と同志に焼えつちやつたから」彼はぼさりと投げ出していつた。

「煙草入は焼けたつて鏡だら灰掻掃けば有る筈だ、外に盗る奴ざ有りやすめえし」小柄な爺さんの目は光つた。

「なぬに分んねえよ、おつう等毎日來て、も其の噺やねえんだから、俺らどうせ癒つか何だか分りやすめえし、要らねえな」

「なぬに、俺れ聞いて見なくつちやなんねえ、出すも出さねえも有るもんか」小柄な爺さんは吐いて

「行けはあ、汝りや大けえ姿して、呉ろの何だのつて」と與吉を嗚鳴りつけた。與吉は悄悄と出て行つた。卯平は少し目を開いて與吉の後姿を見た。涙が止めどもなく出た。彼はそれを拭はうともしなかつた。

其の夜温度が著るしく下降した。季節は彼岸も過ぎて四月に入つて居るのであるが、寒さは地に凝りついたやうに離れなかつた。夜半に卯平はのつそりと起きて圍爐裏に籠を燻べた。ちろ／＼と鐵瓶の尻から燃えのぼる火は周圍の間に包まれながら衰れた卯平の顔にはの明るい光を添へた。彼は勢ひない焰の前に目を瞑つた儘唯沈鬱の狀態を保つた。彼は殆んど動かぬやうにして棄て、置けばすつと深く沈んで畢つたやうに冷めて行く火へぼちり／＼と籠を足して居た。彼は暫く自失したやうにして居て籠の火が周圍の間に壓しつけられようとして僅に其の勢ひを保つた時彼はすつと立ち上つた。彼の糜爛した横顔はもう火の焔びようとして居る薄明りにぼんやりとした。火はげつそりと落ちて彼の姿が消え入らうとした。彼は戸を開けて跟踪けながら出た。寒い風が冷たい刃を浴びせた。卯平は悚然とした。

勘次等三人は其の夜も凝集つて薄い蒲團にくるまつた。勘次は足に非常な冷たさを感じて、うと／＼として居た眠から醒めた。手足を伸ばせば括りつけた葎や蓆の葉に觸れてかさ／＼と鳴る程狭い室内を、寒さは束ねた松葉の先でつ／＼とやうに徹宵其隙間を狙つて止まなかつた。勘

次は目が冴えて畢つた。彼は北に枕して居た。後の林が性急に騒いでは又静まつてさうしてさわ／＼と鳴つた。北風が立つたのだ。低い粟幹の屋根から其括りつけた葎や蓆の葉には冴えた耳に漸と聞とれるやうなさら／＼と微かに何かを打ちつけるやうな響が止まない。漸次に其の響も消滅して、隙間を求めて侵入する寒さの度が加はつた。何處かで凍つた土へ響くやうな雑の聲が飛走つて聞えると夜は櫓の隙間から明るくなつた。勘次はおつぎを起した。彼は夜が明けければ蒲團に堅くなつて居るよりも火にあつた方が遙によかつた。彼は明けるのを待遠にして居た。おつぎは外へ出ようとした。外は意外に積り掛けた雪が白かつた。更に積りつゝ、ある大粒な雪が北から斜に空間を掻亂して飛んで居る。おつぎは少時立ち凍んだ。大粒な雪を投げつゝ、吹き落ちる北風がどつと寒さを煽つた。勘次は狭い土間に掻き集めてあつた落葉や籠に火を點けた。烟は低い櫓を偃つて、ぐる／＼と空間が廻轉するやうに見えつゝ、飛び散る忙しい雪の爲に逃げ行く道を妨げられたやうに低く彷徨うて行く。おつぎは外側に置いた手桶を執つた。北風の吹きつける雪は一つの手桶を半分白くして居た。おつぎは低い櫓の下を一步踏み出した。北風は待つて居たといふやうに、其の亂れた髪を毛を吹き捲つて、大粒な雪が争つて首筋へ群り落ちて瞬間に消えた。さうして又衣物の上に軽く軟かに止つた。おつぎは釣瓶の竹竿

が北から打つける雪の爲に堅に一條の白い線を描きつゝ、あるのを見た。ちら／＼と目を昏すやうな雪の中に樹木は悉皆純白な柱を立て、釣瓶の縁は白い丸い輪を描いて居る。おつぎは竹竿へ手を掛けると軽い軟かな雪はさらりと轉けて落ちた。おつぎは一杯を汲んでひよつと願つた時後の竹の林が強い北風に首筋を押しつけては雪を摺んでばわつと投げつけられながら力の限は争はうとして苦悶して居るのを見た。おつぎは見るなと吹きつける北風を當面に受けて呼吸がひつとつまるやうに感じてふと横手を向いた。少し離れた柿の木の下におつぎは吸ひつけられたやうに疑ひの目を睜つた。おつぎは釣瓶を放して少し柿の木の下に近づいた。

「おとつつわ」とおつぎは底の粘る草履を捨て、激しく呼んで駆け込んだ。

「大變だよ、おとつつわ」と今度は少し聲を殺すやうにして勘次を促した。勘次は怪訝な鋭い目を以ておつぎを見た。

「よう、おとつつわ」おつぎの節制を失つた慌しさは勘次を庭に走らせた。勘次は戰慄した。柿の木の下には冷たい卯平が横たはつて居たのである。其大きな體軀は少し柿の木に寄り掛りながら、胸から脚部へ斑に雪を浴びて居た。荒縄が彼の手を轉けて横に體軀を超えて居た。

「爺」とおつぎは其の耳に口を當て、嗚鳴つた。冷たい卯平はぐつたりと俛首れた儘である。

少し傾げた彼の横顔に糜爛した火傷が勘次を悚然とさせた。勘次は夜荷車で運んだ後卯平を見るのは始めていゝあつた。

「おとつつわは、どうしたつちんだんべな」おつぎは勘次を叱つて、卯平の身體を起しながら白く掛つた雪を手で拂つた。勘次は怖／＼手を藉した。卯平の力ない身體は漸く二人の手で運ばれた。勘次は篋の子の上の筵に横へて、喪心したやうに惘然として立つた。彼は復た卯平の糜爛した火傷を見た。彼は何を思つたか忙しく雪を蹴立て、桑畑の間を過ぎて南の家に向つた。一旦開けて又そつと閉じた表の戸口から突然に

「起きめえか」と彼は激しく嗚鳴つた。彼は襦袢を着て籠の前に火を焚いて居る女房を見た。

「何でえ」と亭主の驚いていふ聲が近く聞えた。勘次も驚いて上り框の蒲團から首を擡げた亭主を見た。

「大變なこと出来たよ、俺ら家の」と勘次はこそつばい喉から漸くそれだけを吐き出した。

「来てくんねえか」と彼は簡單にさういつて、思ひ出したやうに又雪を蹴つて走つた。慌てた彼は闕も跨なかつた。南の家の亭主は勘次の容子を見て尋常でないことを知つた。然しながら彼は極めて不判明な事件に赴くには、直に起る多少の懸念が吹き捲る雪に逆つて、蓑も笠も持



たずに行つて行く程慌てさせる譯には行かなかつた。彼は土間に轉がつた下駄を探した。非常な勢ひで積らうとする雪は、庭から庭を繼ぐ桑畑の間に下駄の運びを鈍くした。彼が勘次の小屋を覗いた時は低く且狭い入口を自分の身體が塞いで内を薄開くした。外の白い雪を見た彼の目が暫く昏んだ。彼は只勘次が與吉を叱る聲を耳の傍で聞いた。

勘次が歸つた時卯平は横へた儘であつた。淺く掛つて居た雪が溶けて卯平の襦袢が少し濡れて居た。彼は復た糜爛した火傷を見ると共に、卯平の懐へ手を入れて居るおつぎを見た。

「おとつつわ、暖えんだよ」おつぎはいつて又

「呼吸つえてんだよ」他を憚るもの、やうに低く聲を殺していつた。勘次は勢ひづいた。彼は突然與吉を起した。蒲團を捲つて與吉の腕を引いた。與吉は例にない苛酷な扱ひに驚いてまだ眠い目を睜つた。

「急えて、それ、衣物」と勘次は只おろくして居る與吉を叱りつけた。

「そんなちやまあよかつた。何しても蒲團へ寝かせた方がえ、な、暖まりせえすりや段々よくなつべから」南の亭主は數分時の前から二人を衷心より狼狽せしめた事件の簡単な説明を聞いた時いつた。

「衣物濡れたやうだな、脱せたらよかつべ、それに酷く汚れつちやつたな」亭主はいつて捲つた蒲團へ手を當て見た。

「此ら暖くつてえ、鹽梅だ、冷させちやえかねえ」彼は掛蒲團をとつぶり蓋した。

「さうだな衣物は焙る間仕やうねえなそんなちや襦袢でも俺ら家から持つて来つとえ、な、此の蒲團だけちや暖まれめえこら」彼は少し權威を有つた態度でいつた。狭い小屋の焚火は消えて居た。怪訝な容子をして遠ざかつて居た與吉が落葉を足して暫く燻ふらした。

「汝また、それ、おつう見てやれ」勘次は與吉に注意の言葉を殘して駆け出して行つた。

「蒲團も持つてらば持つて来た方がえ、な」南の亭主の聲は段々に大粒に成つて飛んで居る雪の亂れの中に消え行く勘次の後から追ひ掛けた。

勘次は二人を加へて勢ひづけられた手を敏活に動かして、まだ暖まつて居る蒲團へそつと卯平を横へた。卯平の冷たい身體には、落葉の火でおつぎが焙つた襦袢と夫から餘計な蒲團とが蔽はれた。卯平の微かな呼吸が段々と恢復して来る。勘次はどん／＼と落葉や蘆朶を焚いた。彼は其の時雪の林に燃料を探すことの困難なことを願慮する遠さへ有たなかつたのである。

午後になつて此の例年にない雪も歇んだ。空が左もがつかりしたやうにぼんやりした。おつ

きが騒いだ心も静まつて又水を汲みに出た時、釣瓶の底は重く成つて抑へた鍵の手から外れようとして居た。後の竹の林はべつたりと儼首れた。冬のやうにさら／＼と潔い落やうはしないで、濕ひを持つた雪は竹の梢をぎつと攪んで放すまいとして居る。竹は苦しい呼吸をするやうに小さな枝が一つづつ、びらり／＼と動いて其の壓迫から遁れようと力めつゝある。北から見れば白い柱であつた樹木の幹も悉皆以前の姿に成らうとしてずん／＼と雪を轉がした。庭から先の桑畑は唯一杯に白い。地上数寸の深さに雪は積つて居た。桑畑の端の方に蓋に立つた菜種の少し黄色く膨れた蕾は盎然と其雪から伸び上つて居る。其處らには枯れた蓬もほつり／＼と白い褥に上體を擡げた。頬白か何か、菜種の花や枯蓬の陰の浅い雪に短い臍を立て、見たいのか桑の枝をしなやかに蹴つて活潑に飛びおりました。さうして又枝に移つた。

後の田圃では、水こけの悪い田には降つてる内から雪は溶けつゝあつたので、畦畔が殊更に白い線を描いて目に立た。其處にも堀の邊の赤い實の錆びた野茨の枝に堅に成つたり横に成つたりして、ずん／＼と消え行く雪を悦ぶやうに頬白がちよん／＼と渡つた。夕方には田圃の白い線も途切れ／＼に成つた。何處の梢も白い物を止めないで疲れたやうに濡て居た。雪は悉く土に落つて居つた。其落ついた雪を突き上げて何處の屋根でも白い大きな塊のやうに見える

た。枯木の間には殊更それが明瞭と目に立つた。黄昏の煙が蒼く割れた空へ吸はれて静かな日は暮れた。

卯平はすや／＼と呼吸を恢復した儘で口は利かない。びしや／＼と飛沫の泥を蹴りつゝ粟幹の櫓からも雪の解けて滴る勢ひのい、雨垂が止まないで夜に成つた。其の夜南の女房は蒲團を二枚肩に掛けて持つて来た。一つには義理が済まぬといふので卯平の容子を見に来たのである。其れは二度目であつた。手ランプもない間い小屋の内に暫く語つて女房が去つた後、與吉は卯平の裙へ潜らせた。おつきは其の一枚の蒲團を掛けて卯平に添うて身を横たへた。勘次は土間へ筵を敷いて他の一枚の蒲團を被つてくる／＼と身を屈めた。彼は足を伸ばした儘上體を擡げて一度間い床の上を見た。びしや／＼と落ちる涓滴が暫く彼の耳の底を打つた。

次の日は朝からさら／＼と照つた。暖かい日光は勘次の土間まで偃つた。地上は凡て軟かな熱度を以て蒸された。物陰に一夜保つてゆつくりした雪が慌て、溶けた。土がしつとりとして落ちつけられた。

卯平は目を開いた。彼は不審相にあたりを見た。執念く土にひつついて居た冬が、蒸されるやうな暖かさに居た、まらなく成つて倉皇と逃げ去つた後へ一遍に來た春の光の中に彼は意識

を恢復した。彼は寒さが骨に徹する其の夜のことを明瞭に頭に泛べて判断するには氣候の變化が餘りに急激であつた。彼は其の間人事不省の幾時間を経過した。

彼は與吉の無意識な告口から酷く悲しく果敢なくなつて後で獨で泣いた。憤怒の情を燃すのには彼は餘に疲れて居た。然し自分でも其の時、自分の身に變事の起らうとする事は毫も豫期して居なかつた。彼は圍爐裏の側で、夜の寧ろ冷たい火にあたりながらふと氣が變つてついで庭へ出た。彼は何か足に纏つたのを知つた。手に取つて見たらそれは荒縄であつた。彼はそれからどうしたのか明瞭に描いて見ようとするには頭腦が餘りにぼんやりと疲れて居た。

彼は勘次の庭に立つた。彼は荒縄が手に在つたことを心づいた時、柿の木の高い枝にそれを引掛けようとして投げた。彼の不自由な手は暗夜に其の目的を遂げさせなかつた。彼は幾度投げても徒勞であつた。身を切るやうな北風が田圃を渡つて、それを隔てようとする後の林をこらつと壓へては吹き落ちて、彼の手の運動を全く鈍くして畢つた。懸て後の林の梢から斜に雪が吹きおろして來た。卯平は少時躊躇して柿の木根に其の疲れた身を倚せた。暫くして彼は雪が冷たく自分の懷に溶て不愉快に流れるのを知つた。彼はそれから身體が固まるやうに思ひながら、疎い白髪が梳られるのを、微に感覺を有した。雞の聲が耳に遠く聞えて消滅するの

を知つた。彼は遂にうとくと成つて畢つた。更に數十分間其の儘に忘れられて居たならば彼は其の時自分が欲したやうに冷たい骸から蘇生しなかつたかも知れなかつた。勘次の牙えた目が隙間から射す白い雪の光に欺かれておつきを水汲みに出した。さうして卯平は救はれたのである。

「爺どうした、心持悪かねえか、はあ」とおつきは卯平が周圍を見た時耳へ口を當て、いつた。

「動かねえでろ爺、喰べてえ物でもねえか」おつきは復た軟かにいつた。卯平は只點頭いた。

「おとつつあ、そんでもちつた確乎してか」勘次は其の尾に跟いて聞いた。はつと息をついたやうな容子は勘次の衷心からの悦びであつた。

「おとつつあ、火傷は痛えけまわだ」勘次は直に後の言辭を續けた。

「枕はおつつけらんねえな」卯平は軟かな目を感めるやうにした。

勘次はふいと駆け出して暫く経つて歸つて來た時には手に白い曝木綿の古新聞紙の切端に包んだのを持つて居た。彼はそれを四つに裂いて、醫者がしたやうに白い練薬を腿の上でガーゼへ塗つて、卯平の横頬へ貼つた曝木綿でぐるぐると巻いた。彼は與吉にさへ白い薬を惜しんで醫者から貰つた儘藏つて置いたのであつた。卯平は凝然として勘次の爲る儘に任せた。不器用

な少し動けば轉け相な糊帯であつたが夫でも勘次の目には心丈夫であつた。彼は自分の恐怖を誘うた瘡痕が白い快よい布を以て掩ひ隠されたのと、自分の爲べき仕事を果し得たやうに感ぜられるので心が俄に軽くすが／＼しくなつた。卯平もどうなることか確とは分らぬながら心の内では悦んだ。

勘次は又何處へか出た。彼は只心がそは／＼として容易くは落つかなかつた。

軟かな春の光は情を含んだ目を瞬きしながら彼の狭い小屋をこまやかに葺や篠の隙間から覗いて卯平の裾にも假つた。卯平は暫く目を瞑つた儘で居たが復たばつちりと目を開いた。側にはおつぎが坐つて居た。

「おつう」と卯平は低い聲で喚んだ。

「何でえ」おつぎは又耳へ口を當てた。卯平は右の手を出して蒲團の上へ伸して

「熱ぼつてえから一枚とつてくんねえか」力ない絶るやうな聲でいつた。

「本當に暖く成つたんだよなわ日輪まで酷く眩しくなつたやうなんだよ」おつぎは例の少し甘えるやうな口吻で一枚の掛蒲團をとつた。

「此の蒲團は板ッ端見てえなんだよなわ、此れとつた方が爺は軽く成つてよかつべなほんに、

さう云つても暖くなるつちやえゝもんだよ、俺ら昨日等見てえちやどうすべと思つたつちや」おつぎは掛蒲團を四つにして卯平の裾へ置いた。

「彼岸過ぎて斯うだことつちや俺ら覺えてからだつて滅多にやねえこつたから此れから暖く成るばかりだな、麥も一日毎に腰引つ立たな」卯平は稍快よげにいつた。

「俺ら家の麥は今ん處ぢや村落でも悪かねえんだぞ、俺らそんだが先の頃ら畑耕あな厭だつけな本當に、おとつつあにや深く耕へ、深く耕あねえちや肥料したつて役にや立たねえからなんて怒られてなわ」

「うむ、畑や深くなくつちや收穫ねえものよそら、俺らあ壯の頃にや此間のやうに淺く耕あもんだと思あねえのがんだから、現在ぢやはわ、悉皆利口なつてつちから俺らにや分んねえが」  
「深く耕つちや逆旋毛立てる見てえで行りつけねえちやなんば大儀えかよなわ、そんだが俺ら今ぢや、汝の方が俺れより深えつ位だなんておとつつあにや云はれんよ」

「大儀えにもよそら、そんでも汝りや能くやんだ、以前は女に三年作らせちや畑は出來なくなるつちつた位だ」

「そつちから俺ら幾らも耕えねえんだよ此の頃らそんでもさうだに大儀えた思はなくなつたがな

俺らも「おつぎがいふのを卯平は又軟かに目を感めるやうにして聞きながら、軽く成つた掛蒲團を足の先で裾の方へこかして少し身動きをした。おつぎは其の時ちらと出した卯平の手を始めて気がついたやうに

「爺は手も痛くしてんだつけな、そんなや先刻薬貼つて貰わとこだつけな」おつぎは卯平の手先を手にして見た。

「こつちはそれ程だひどかねえやそんなや」おつぎは安心したやうにそつと手を放した。

勘次は忙しげな容子をして歸つた。彼は蒲團を二三枚疊んだ儘帯で背負つて來た。

「どうしてえおとつあ、昨夜はそんなや寒かなくなつたつけえ」彼は荷物を卯平の裾の方へ卸して胸で結んだ帯を解きながらいつた。

「熱ぼつてえつて今蒲團一枚とつた處なんだよ」おつぎは横合からいつた。

「うむ、さうだ、此の蒲團は返さなくつちやなんねえから」勘次は獨語して

「どうしたおとつあ、薬貼つてちつたよかねえけ」彼は復白い噁木綿を見ていつた。

「うむ、枕おつつかるやうに成つたからえ、こたえ、に」卯平のいふのを聞て勘次は幾らか冷を以て又白い木綿を見た。

「おとつあ、喫べてえ物でもねえけえ、俺ら明日川向さ行つて來べと思ふんだ」勘次はまた幾らか心に蟬りがあるといふよりも、こつぱい處が取れ切らないやうで然も力めて機嫌をとるやうな容子であつた。

「うむ」と卯平はいつて唾をぐつと嚥んだ。

「格別はあ、喫べてえつち物もねえが」彼の目には又改めて軟かな光を有つた。

「そんなやおとつあ水飴でも買つて來てやつたらよかつべな、與吉げ隠して置けば何でも有んめえな」おつぎは更に卯平を顧みて

「なあ爺、其の方がよかつべ」といひ掛けた。卯平は其の感めるやうな目で微かに點頭いた。

「おとつあ、どうせ茶漬茶碗も要つから茶碗買つてそれさ水飴入えて細で縛つて來う、さうすつとえ、や」

「さうでも何でもすびやな」

「それに、明日行つたら又藥貰つて來う、爺が手さも貼つてやんなくつちや仕やうねえぞ」

「俺ら云はんねえでも藥は氣ついてたのよ」勘次はおつぎのいふのを迎へて聞いた。彼の三尺帯には其の時もぎつと括つた塊があつた。其財布の僅な蓄へは此數日間にどれ程彼を救つた

か知れなかつた。彼はまた幾らかの日用品を求め、餘力を有して居た。彼は開墾の賃金を手にすることが出来ればといふ望みが十分にあつた。只彼は目下其の幾部分でも要求することが、自分の火が焼いた其の主人の家に對して迎も口にするだけの勇氣が起されなかつたのである。

## 二十八

勘次は午餐過に成つて復た外に出た。紛糾かつた心を持つて彼は少し俛首れつゝ歩いた。暖かな光は畑の土の處々さらりと乾かし始めた。殊更がつかりしたやうにしをたれた櫟の枯葉もから〜に成つた。凡ての樹木は勢づいて居た。村落の處々にはまだ少し舌を出し掛けたやうな白い辛夷が、俄にぼつと開いて蒼い空にほか〜と泛んで竹の梢を抜け出して居た。只鶯雀は冬も春も辨へぬやうに、暖かい日南から隠氣な竹の林を求めて低い小枝を渡つて下手な鳴きやうをして、さうして猶且日南へ出て土をびよ〜と跳ねた。凡ての心は暖かな光の中に融けて畢はねばならなかつた。

勘次は依然として俛首れた儘遂に隣の主人の門を潜つた。燒趾は礎を止めて清潔に掻き拂は

れてあつた。中央の大きかつた建物を失つて庭は喬木に圍まれて居る。粘く焼けた杉の木を控へてからりとした庭は、赤土の斷崖の底に沈んだやうに見える。蒼い空を限つて立つた喬木の梢が更に高く感ぜられた。勘次は怖ろしい異常な感じに壓せられた。隣の主人の家族は長屋門の一部に壘を敷いて假の住居を形づくつて居た。主人夫婦は勘次の目からは有聲に災厄の後の亂れた容子が少しも發見されなかつた。主人夫婦の壘らぬ顔が只管恐怖に囚へられた勘次の首を擡げしめた。殊に内儀さんの迎へて聞く態度が、彼のいひたかつた幾部分を漸くに打ち明けしめた。

「お内儀さん、こら運の悪い者な仕やうありあせんね」彼は憐れに聲を投げ掛けた。彼の災厄の後にしみ〜と斯ういふことを聞いてくれる者は内儀さんの外にはまだなかつたのである。

「そんだが此れお内儀さん等家からなんぞ見た日にや爪の垢だからわし等なんぞ辛えも悲しいもねえ嘶なんだが」彼は自分の不運を訴へるのに、自分一身のことより外は何物も其の心に往來しては居なかつた。彼はふと自分の火が焼いたことを思つた時、酷く自分のことのみをいつて畢つたのが濟まないやうな心持がしてならなかつた。

「まあ惜しいといへば紙一枚でも何だが、これ、家は直ぐにも建てれば建つんだが、樹が惜しいことをしたつて云つてゐるのさ、それだが此れもそんなことを云つたつて仕方がないがね」内儀さんは聳然と立ては居るが到底枯死すべき運命を持つて居る喬木の數本を端近に見上げていつた。遠く落ち掛けた日が劃然と其の梢に光つた。勘次の顔は蒼くなつてぐつたりと頭を垂れた。彼は暫く沈黙を保つた。

「どうしたね、私も氣のつかないことをして居たが、お前も丸焼で仕やうあるまいが少しは錢でも持つて行くかね」内儀さんは勘次の心を推察したやうにいつた。

「へえ」勘次の首は更に俛れた。彼の目は潤んだ。

「わしはわ、そんならなんぼ助るかも知れぬせんが、お内儀さん處さう云つて來る譯にも行がねえで」と勘次は亂れた頭髮へ手を當て、媚びるやうな容子をしていつた。

「それがお前にやる位ならどうにか成るから心配しなくつても好いよ」

「わしも此れ、罰當つたんでがせう、さう思ふより外有りあせんから」勘次は暫く間を措いて「わしも嗚こと因果見せて罪作つたの悪いんでがせう」彼の聲は沈んだ。

「お内儀さん、わしどんな形にか家も建てなくつちやなんねえから、そんな時や家族の極りもつ

けべと思つてんですが、お内儀さん又わしこと面倒見ておくんなせえ、わし等野郎も其内はあ大く成つて來つから學校もわとちつとして百姓みつしら仕込ひべと思つてんでがすがね」

「さうかえ」内儀さんは慰めるやうにいつた。

「お内儀さん親不孝だんなちな、親が警察へでも願つて出なけりや巡査ばかりぢやどうすることも出來ねえもんでござんせうかね」勘次は先刻からの嘸の内にも何だか後から物に襲はれるやうな容子が止まなかつたが遂に斯ういつた。

「さうさね、巡査だつて無闇にどうかするといふこともないんだらうと思ふやうだがね」内儀さんは意外な面持でいつた。

「此れからはわ、わしも爺様こと面倒見べと思ふんですがね、今つからでもお内儀さん間合ねえこたありあんすめえね」

「さうだよ、老人なんていふものは少しの加減なんだから、まあ心配させないやうにした方が好いよ、さういつちや何だか後幾らも生きるんぢやなしねえ」

「へえさうでがすよ、昨日等つからちつと柔え言辭掛けつとうるしがつて居んですから、それからわし野郎が貰つて來た火傷の薬も貼つてやつたんでさ、薬足んなく成つちやつたから醫者様

「さ行つて来べと思つたつけが、今日は午後で居めえと思ふから明日にすべと思つて止めたせ、明日行つたら水飴でも買つて来てやれなんておつうも云ふもんでがすからね」

「火傷したなんて聞いたつけがそれでも家へ連れて来てかね」

「へえ」勘次は其の拂曉のことをどうしてか内儀さんがまだ知らぬらしいのでほつと思つたが又自分から耻ぢて、簡単に曖昧に斯ういつた。

「お内儀さん、こうちつとでもよくねえ錢へえつちや未始終はどうしてもえ、こたわりあんすめえね」勘次は更にまた酷く懸念らしい容子をして突然に聞いた

「さうさねえ」内儀さんは勘次の心持が明瞭とは分らないので氣の乗らぬやうにいつた。

「そんながお内儀さんさうえ錢は自分のげ役に立てせえしなけりやどうしても遠えあんすべえね」勘次は内儀さんに分つても分らなくても、そんなことを考へる餘裕がなかつた。彼は只自分の心配だけを底から蓋から打ち傾けて畢はねば堪へられなかつたのである。

「さうだが、それもどういふ筋の錢だか分らないがそりや使つちやいかなんだらうさね」

「そんなちやお内儀さん他人の錢なくしたのなんぞ發見けても知らねえ容子なんぞして、後で遣んな盗つた見てえで變な時や、何でかで落とした丈の物でもやればそれでも遠えあんすべね」

勘次は少し自分のいふことの内容を打ち明けるやうにいつた。

「黙つて居ればそれ切なんだが」彼は獨喉の底でいつた。

「そりやそんなことしないで發見けた物なら其儘返すのが本當だよ」内儀さんは聲は低かつたがきつぱりいつた。勘次の惑うた心の底にはそれがびりりと強く響いた。

「そんなちやお内儀さんそれ返して又其の外にも何とかしたら冥利の悪りいやうなことも有りあんすめえな」彼は情なげな目で内儀さんをちらりと見ていつた。

「そんなこた仕なくつたつて何もよかりさうなもんだね」内儀さんは勘次の餘りに懸念らしい容子に疾から心づいたことがあつた。内儀さんは暫く聞かなかつた彼の盜癖に思ひ至つた。然し彼が自分から甚だしく悔いつゝあるらしいのを心に確めて強ひては追求しようといふ念慮も起し得なかつた。勘次は只不便に見えた。内儀さんはふと思ひ出して少しばかりの銀貨を勘次の側へ並べて

「そりやさうと、お前も家族の極りをつける積だつていふんだが、まわどうする積なんだね」と静に聞いた。

「さうでござんすね」勘次はぐつたりと俯首れて言辭の尻が聞きとれぬ程であつた。深い愛が



顔面の皺に強く刻んだ。

「わしも此れ……」と彼は微かにいつたのみで沈黙を續けた。彼は内儀さんの前にどうして  
も逃なければならぬことに其心が惑亂した。彼はぼうつとして目が昏まうとした。遠く喚ぶ  
やうで然も近い聲の爲に彼が我に返つた時

「それぢやお前、まゝ此錢を藏つたらどうだね」と内儀さんが促したのであつた。裏心から困  
つたやうな彼に向つて内儀さんはもう追求する力を有なかつた。

「賊にどうもお内儀さん」彼は財布を帯から解いて出した時酷く減つて畢つたやうに感じて、  
其の財布を外から一寸見て首を傾けた。彼は又財布の底の錢を攫み出して見た。焼趾の灰から  
出て青銅のやうに變つた銅貨はぼつ／＼と焼けた皮を残して鮮かな地質が剥けて居た。彼はそ  
れを目に近づけて暫く凝然と見入つた。彼は心づいた時俄に怖れたやうに内儀さんを顧つては  
やらりと其の錢を財布の底へ落した。(完)

明治四十五年五月十六日印刷  
明治四十五年五月十九日發行

土  
實價金壹圓拾錢

著者 長塚節

發行者 和田静子  
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 金崎金平  
東京市日本橋區安町三丁目十四番地

印刷所 東洋印刷株式會社  
東京市日本橋區通四丁目二番地



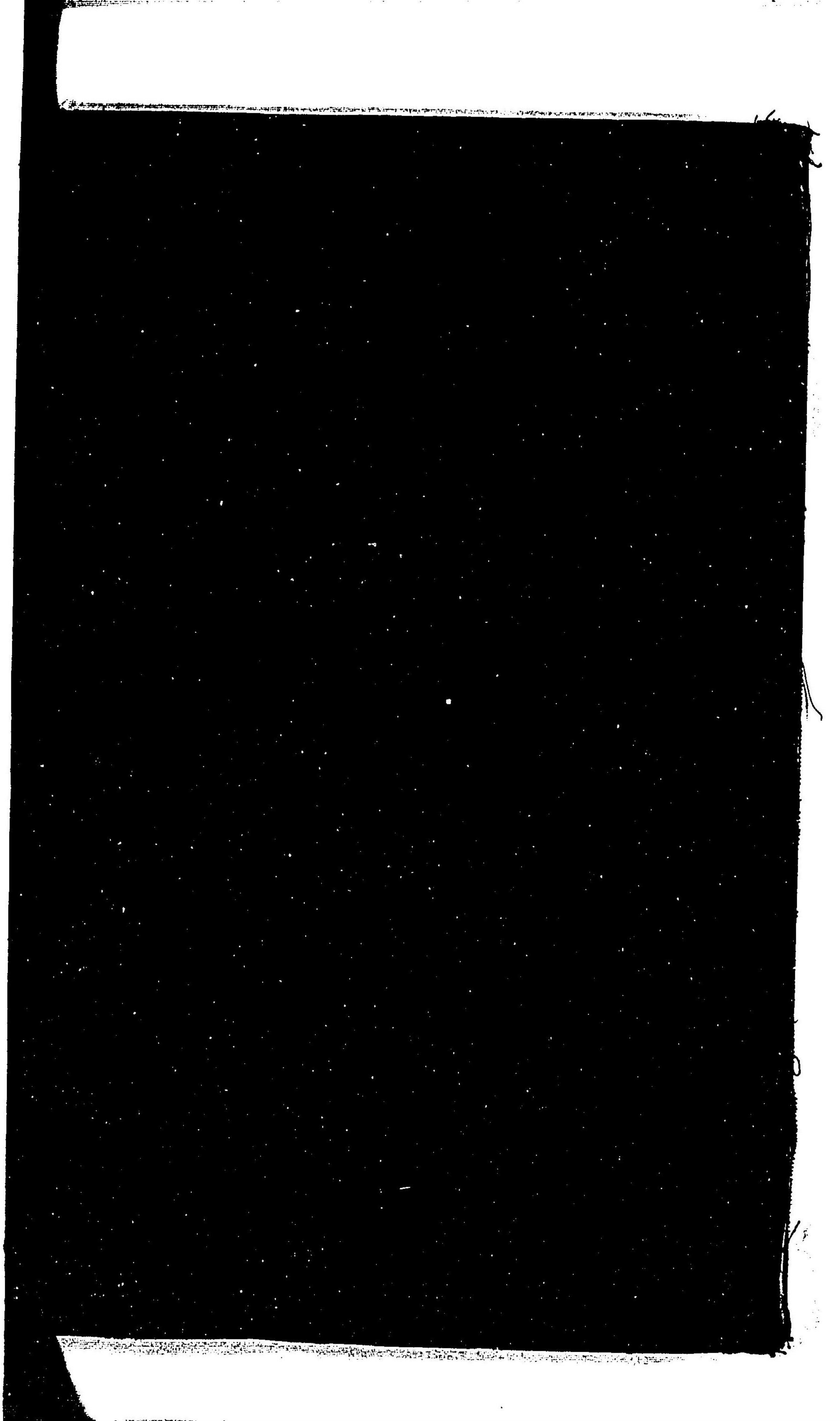
發行所 春陽堂  
東京市日本橋區通四丁目五番地

電話本局五十一番  
振替口座東京一六一七

著花鏡	著葉紅故	著伴露	著石漱	著外鷗
白鷺 (版再)	不言不語 (版五十)	露伴集 (三版) <small>(內容)對談、書生商人、辻淨瑠璃、一利那、奇男子、伽羅物語、佐渡が島、狂因果、蘆の一本、有願詩人、薩耳敏砲、●言</small>	三四郎 (版六)	卽興詩人
菊版箱入美本 實價金壹圓	菊版大和綴 實價金參拾錢	第一卷 袖珍形美本 實價金壹圓卅錢	菊版布張表裝 實價金壹圓卅錢	上卷 實價金六拾錢 下卷 實價金六拾錢

著果青	著汀掬	著花鏡	著外天	著葉風
壁 上	仕 合 者	鏡 花 集 <small>(内卷)女仙前記、きりく川、縁結び、沼夫人、海 異記、雄蝶、七本柳、春霞、七草、厄ヶ紅</small>	魔 風 戀 風	青 春
菊 版 實價金六拾五錢	菊版表装頗美 實價金壹圓	第三卷 袖珍形美本 實價金壹圓廿錢	前編(廿三版)實價金六拾錢 中編(廿一版)實價金六拾錢 後編(十九版)實價金六拾錢	春の巻(六版)實價金八拾錢 夏の巻(四版)實價金八拾錢 秋の巻(三版)實價金八拾錢

329  
34



329

134

094560-000-5

329-134

土

長塚 節/著

M45

DBQ-2079



